

# 新任教員・昇任教員紹介

## 新任教員

平成29年1月1日付



准教授

田中 真樹 (たなか まき)

本学歯学部卒業、同大学院歯学研究科博士課程修了。札幌医科大学医学部内科学第四講座訪問研究員、米国John Wayne Cancer Institute研究員、株式会社レノメディクス研究員、札幌医科大学医学部感染制御・臨床検査医学講座助教等を経て、本学就任。歯学博士。

平成28年12月12日付

薬学部 助教(薬理学講座(薬理学))

湯谷 美規子

平成29年3月1日付

歯学部 助教(口腔機能修復・再建育学系(歯周歯内治療学))

山田 梓



## 定年退職される先生からのメッセージ



薬学部 教授

小田 和明

「家、家にあらず、継ぐを以て家とす」

今年薬学部は40期生を社会に輩出し、5,300名以上の薬剤師が日本全国で活躍することになる。南は沖縄、北は北海道まで…。私は本学開設当初から在籍し42年間、人生の2/3以上、ここで教員生活を送って来た。本学の設立当初を知る人間が私を含めこの1~2年でほぼ本学を去って行く。その辺りの思いを拙稿に綴り役目を果たす事としよう。

薬学部のみで発足した本学。学生は1年半余り道東の音別キャンパスでの教養教育を終えて、専門課程をここ当別で過ごすこととなる。学生も薬剤師国家試験を控えて不安いっぱいなのは勿論のこと、色々な大学から集まった教員もやる気は心に強く秘めてはいたものの、私立大学の薬学教育には不慣れ、手探りの船出だったように思う。各教員は自分が経験した教育がベストであると信じて、侃々諤々議論を戦わせ、ある方向性を見いだす。しかし、いつかそれでは立ち行かなくなる現実の厳しさは何回も直面する。国家試験の結果も低迷することがあった。そんな中、学生諸君と力を合わせて文字通り試行錯誤の連続ではあった

が、現在も誇るべき「学生に寄り添った教育」が時間をかけて育まれてきた。手前味噌ではあろうが我々の先輩教員は、ベストに近い指導体系を作り上げてくれたと考えている。この黎明期が本学の第一世代だとすると、その方々の薫陶を受けた我々は第二世代ということになる。40年余を経て、今薬学部の教員の過半数は本学出身者となった。このような第三世代の方々には、時間をかけて育まれた本学の良い部分は継続し、新たな改革は躊躇無く成し遂げて頂きたいし、必ずそうなると信じている。

表題は、足利義満に寵愛され能楽を完成させた世阿弥の風姿花伝いわゆる「花伝書」の言葉である。家は今充実していれば家と呼ばれるに値するのではなく、そこで育まれた知恵、伝統を次の世代に引き継いで初めて本当の家となるという教訓である。私もそろそろ次の世代に家を引き継ぐ時が来たということである。諸先生方、学生諸君の健闘を心から祈念している。



薬学部 教授

島村 佳一

今年の冬は通い慣れた車窓の風景がいとおしく、気のせいかな当別の厳寒もさほど感じません。2000年7月に赴任して以来、石狩当別の北海道医療大学薬学部には16年余り勤務しました。東京・大阪での20年の研究職に続いて、故郷の北海道で教育研究職に長く従事できたことに感謝しております。この間、講義・試験、卒業研究や大学院生研究発表、地区別父母懇談会、九十九祭など楽しい大学行事の思い出をたくさんいただきました。

それまでの研究所では英語論文ばかり読み、赴任当初は日本語の教科書を読む時にぎこちなさを体験しましたので、日本語の試験問題文を読めないというスマホ世代の学生さんの気持ちも少しは分かります。自分の学生時代には講義配布資料は非常に少なく、授業中は黒板やスライドの文字や図を必死で写しました。借りた友人のノートも手書きで写しました。最近の動物実験の学習研究では、脳神経回路を高速度で活

動させることにより、その経路だけに長期記憶が形成されることが分かっています。今の学生さんは何でもコピーや写メでできて便利ですが、それをただ眺めても長期記憶できそうにありません。学習内容を文章や図にまとめたりすると、おそらく脳が高速度で活動し長期記憶が形成され、試験の成績も向上することと思います。

今から思い返すと、着任当初は講義以外の大学業務については知らないことばかりでした。先生方や事務の方へ質問やご相談で何う時は緊張していたものですが、温かくご指導いただいたおかげで、あまり大きなトラブルも起こさずにこの日を迎えられるました。多くの先生方や事務の方のお力添えをいただけたことに、この場をお借りして心から感謝申し上げます。2017年3月31日で退職いたします。最後になりましたが、北海道医療大学の更なるご発展と皆様のご活躍を祈念いたします。



歯学部 教授

田隈 泰信

3月末日をもって、43年間の歯学部教員としての務めを終えることになりました。城西歯科大学(現、明海大学歯学部)に7年間、北海道医療大学歯学部には1981年から36年間お世話になり、この間、1年半の米国留学も経験させて頂きました。お陰様でなんとか無事、定年退職の日を迎えられますことを、衷心より感謝申し上げます。

36年前、生化学講座の講師として着任し、講義の準備を始めたとき、大変戸惑ったことを思い出します。それまでの7年間、私は、研究は生化学でしたが、教育では口腔組織学、歯の解剖学という歯学部の特化した領域に携わってまいりました。そういう私の目から見ると、生化学の教科書のどこを探しても、歯学部らしい生化学の記述が見当たらないのです。何を講義したらいいか、当惑しましたが、それもそのはず、当時、歯科医師国家試験に生化学の問題はありませんでした。いま生化学の国試問題と悪戦苦闘する学生諸君には、有難迷惑な話かも知れませんが、口腔生化学の体裁が整ったのは、せいぜい最近20年以内のことなのです。

赴任当時、あいの里に近い自宅から、石狩河口橋を渡って、片道35キロの道を車で通っていました。石狩河口からスウェーデンヒルズへの道は、曲がりくねった難所、吹雪くと路肩から転落する車が続出したのです。あれから幾星霜。3.11の震災以降、工事が加速し、あいの里と太美をつなぐ2本目の橋が、昨年ついに完成しました。高速道路のようなバイパスを走りながら、10年以上、工事の進捗状況を毎日横目に見ながら通勤したことを回顧し、慶賀したものです。

退職前の3年間、私の頭は第58回歯科基礎医学学会学術大会のことについてばかりでした。準備作業から大会終了後の決算報告まで、学会成功のためにご尽力頂いた中澤準備委員長はじめ基礎系全教員の皆様に篤く御礼申し上げます。

最後になりましたが、北海道医療大学の益々の繁栄と学生諸君の健闘を、陰ながら応援しております。長い間、大変お世話になりました。

## 昇任教員

平成28年12月1日付



歯学部 准教授  
(総合教育学系(歯学教育開発学))  
**門 貴司** (かど たかし)

本学歯学部卒業。同大学院歯学研究科博士課程修了。北海道医療大学歯科内科クリニック研修歯科医、同臨床助手、本学歯学部口腔機能修復・再建学系歯周歯内治療学分野講師等を経て、准教授昇任。歯学博士。

平成29年2月1日付



歯学部 准教授  
(口腔生物学系(薬理学))  
**根津 顕弘** (ねづ あきひろ)

本学薬学部卒業。同大学院薬学研究所修士課程修了。日本メジフィジクス株式会社、米国国立衛生研究所客員研究員、本学歯学部歯科薬理学講座助手、同口腔生物学系(薬理学)助教、同口腔生物学系(薬理学)講師等を経て、准教授昇任。歯学博士。



歯学部 教授  
**柴田 考典**

2002年9月1日に当大学に赴任し、この3月末で14年7か月となります。前職(山形大学医学部歯科口腔外科学講座)との差違に戸惑いながら、これまで大きな事件・事故もなく無事過ごせましたことは、多くの皆様からのご指導ご支援のおかげと感謝しております。

着任により「研究および臨床中心の生活」から、歯学部4、5、6学年や大学院生を対象とする「教育中心の生活」への変更ということで、生活は大きく変わりました。

この変化は私の意図したもので、口腔外科学は医師国家試験の対象領域でないことから、前職では徐々に歯科医師養成に直接関与したいと希求するようになっていたからです。

大学人としての私の40年間は、大きく3期に分けられます。修業期としての東京歯科大学口腔外科学第二講座助手期間(1989年3月まで)、発展期としての山形大学医学部歯科口腔外科准教授期間(2002年8月まで)、社会還元期としての本学教授期間に分けられます。



リハビリテーション科学部 教授  
**上野 武治**

2013年4月、新設のリハビリテーション科学部作業療法学科に赴任し、完成年次の今春、退職します。わずか3年の短い期間でしたが、皆様には大変お世話になりました。

赴任前の7年間は北星学園大学で福祉職の教育を、それ以前は26年間、北海道大学でOT・PTの教育を担当しました。今回、7年ぶりに本学部に赴任して専門教育の急速な発展と充実を強く実感することができました。ただ、この間は泉学部長が本誌前号でも記しているように、学年進行に伴う教育業務の拡大に加え、大学院の開設や言語聴覚療法学科の編入が一挙に行われました。このため、私以上に、実習をはじめ専門教育を担当する教員の負担は非常に大きかったと思います。1期生を送り出した今、医学医療の将来変化を見据えて、この間の教育をしっかりと点検・総括し、基礎的教育に力点を置いたカリキュラムの編成を期待します。また、研究途上の若い教員を多く抱える本学科としては、



リハビリテーション科学部 教授  
**亀井 尚**

1991年の春、札幌医療福祉専門学校・言語聴覚療法学科長として赴任し、今年の3月にリハビリテーション科学部にて定年退職を迎えることとなりました。26年間にわたる教員生活に区切りの年を迎えることとなりますが、「光陰矢のごとし」といった思いです。

赴任当時、専門学校の校舎は「あいの里」にありましたが、ニュートンが造成中の頃で、「西部劇の舞台のような」風景が広がっていました。開設当初、言語聴覚士の国家資格がなく、学生募集に苦労しましたが、1997年に言語聴覚士法が国会で成立し身分制度が導入されたのを機に、志望学生も増えました。その後、教育の高度化が検討され、2002年、本学心理科学部に言語聴覚療法学科が開設されました。当時は、専門学校と心理科学部の「言語聴覚療法学科長」を併任して

本学に赴任以降は、皆様の協力の下、まず歯学部口腔外科学教育および口腔外科診療体制の改革に注力しました。これら改革は、その後の「臨床実習開始前における共用試験」の正式実施(2005年度)、「歯科医師国家試験の相対評価」導入(2006年、第98回国家試験)、「歯科医師臨床研修の必修化」(2006年4月)等、歯科医学教育・研修を取り巻く大きな環境変化に対応する礎となりました。

歯科医師として現役である間は自己研鑽を休むことはできません。そのために学生諸君には、在学中に少なくとも問題発見能力や問題解決能力の涵養に努めるべく学習目標を掲げて参りました。

一方、2007年7月のあいの里への病棟移転および手術室の新設では、過去の手術部改装の経験を生かし、満足のいく手術室を設置できました。是非活用して欲しいと願っております。

最後になりましたが、皆様のご活躍と本学のご発展を心から願っております。

研究に専念できる環境の重要性も理解して欲しいことです。

最後に医療職の教育機関としてぜひお願いがあります。それはあまりにも当然のことですが、教職員と学生の禁煙の徹底です。前任の大学では、本学の、特に幹事教職員のタバコ汚染の酷さを幾度となく耳にしましたが、これは道内私学関係者の共通認識なのでしょう。本学赴任後、JR駅付近の「特区」と称する喫煙所に群がる姿を目にし、歯科クリニック棟のエレベーターでタバコ臭に曝されて納得することができました。さらに、こうした本学の噂は学外の医師の間にも拡がっていることを知りました。医療系総合大学としての魅力を受験生に周知させる活動を展開しながら、医療職教育への信頼を日々傷つけているのでは本末転倒です。本年4月から喫煙所は撤去されるようですが、禁煙の徹底には全学挙げての粘り強い取り組みを要することだけは確かです。

本学の再生した姿を大いに期待しています。

おり、多忙な日々を送っておりました。専門学校は2年後の2004年3月に閉校しました。その後、リハビリテーション科学部が開設されたことに伴い、2015年からはリハビリテーション科学部言語聴覚療法学科としての所属になりました。

この間、多くの卒業生が「言語聴覚士」として全国津々浦々で活躍している現状をとても誇りに感じます。これからも、人口の高齢化とともにリハビリテーション医療における言語聴覚士の役割が高まっていくと思われます。「北海道医療大学ブランド」を背負った「言語聴覚士」が増えていくことを期待しております。

最後になりましたが、教育活動、研究活動の場を与えていただいた学校法人東日本学園及び北海道医療大学に感謝を申し上げたいと思います。

With heartfelt thanks.